関西自然保護機構会報16(1)：87−100, 1994

里山管理と鳥類，その課題

総合環境研究所環境計画部　長　野　義　春

OBJECTS OF BIRDS AND COUNTRYSIDE COPPICE MANAGEMENT

Yoshiharu NAGANO *Synthetic Environment Research and Planning Institute Corporation.*

里山は，かつて私達の祖先が生活する上で，燃料（エネルギーの源）や，水田の堆肥を補給するためなどに利用されてきたものであり，生活に密着していた。しかし，電気・ガスなど新しいエネルギーの普及にともない，しだいに里山の利用は少なくなっていった。人間が生活するうえで利用価値の少ない里山は，様々な開発の対象になっている。この他に里山はもう一つの問題をかかえている。かつての里山は「シバ刈り」（燃料の補給目的のためなど）などにより林床に陽光が入る環境や暗い環境もある空間のモザイクと，植物の成長過程による時間的モザイクができあがっていた。しかし，里山の利用が少なくなったため，植物は密生し，里山は暗い環境のみになり，林床に陽光が入らなくなった。かつて私達の祖先が利用していた里山の環境と現在の里山の環境は大きく変わりつつある。長年空間と時間のモザイクの中で生息していた里山の生物達は，この環境の変化に適応できるものであろうか。植物が密生する事により大型鳥類の進入や林底を利用する鳥類の進入を妨げることにならないか。また，陽光が入りにくくなることで，鳥類への影響はどのようなことが考えられるか。こういった里山の環境が変化することにより，絶滅が予想される鳥類があるのではないか。

近年，市民による里山管理が行われつつあるが，この里山管理を行うことによる鳥類への影響についての報告は少ない。里山の植物密生化により絶滅が予想される鳥類があるとすれば，里山管理により絶滅を防ぐことが可能であろうか。そして，絶滅を防ぐことが可能とすれば，どのような管理方法が適切であろうか。講演者を含めた総合討論においては，コメンテーターとしてむかえた東京大学秩父演習林の石田健と大阪自然環境保全協会の後藤裕己の両氏が，会場からは農林水産省食品総合研究所の池長裕史，姫路工業大学自然環境科学研究所の江崎保男，農林水産省森林総合研究所の伊藤宏樹の各氏から貴重な発言をいただいた。里山管理と鳥類の研究を行うにおいて何が望まれるか考えたい。

この特集を行うきっかけとなったのは1992年11月に大阪市立大学で開かれた日本鳥学大会である。この時に行われた自由集会での総合討論の内容を発表してはどうかと，大阪市立大学動物社会学研究室の山岸哲教授のおすすめがあり実現できたものである。また，立教大学一般教育部生物学研究室の上田恵介助教授，日本野鳥の会研究センターの金井裕氏の協力を頂いた。以上の各氏に記して御礼申しあげる。